

Beyond the lost.

浪速の風来坊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2025年のシーズンに起きた悲劇。

そこから動き出す新たなグランプリシーンを描く。

独自解釈も交えながら気が向いた際に更新します。

準拠は無印〜SINまでのOVAシリーズ。

オリジナルの人物も出てきますが、

特定の人物を主人公に据えるかは未定です。

目次

1話	英雄退場	1
2話	穴埋め	4
3話	現況	6
4話	新条の葛藤	10
5話	同志	13
6話	一強	16
7話	展望	21
8話	終幕	24
9話	密会	27
10話	旧友	30
11話	究明 前編	33
12話	究明 中編	36
13話	究明 後編	39

1話 英雄退場

2025年初夏、一人のヒーローがこの世を去った。誰よりも速く、誰よりも強く、誰よりも上手く。若くしてサーキットの帝王と呼ばれた男のあまりにも早すぎる死は、誰にとってもショックな出来事であった。その男の名は…

2025年8月某日

「これで一通りは片付いたわね。いい？ 貴方にはこれからの長い人生、幸せに過ごしてもらわないといけないの。それが亡くなった彼のために私たちが出来るせめてもの恩返し。わかってくれるわよね？」

少しだけ普段の飄々とした雰囲気に戻りつつあった美しい女性は、健気に喪主を務めあげて緊張の糸が切れてしまったのか泣き出してしまった妻に優しく声をかけていた。無論、世界的なドライバーであった夫の死に際して最大限のサポートは誰しもが惜しまなかったとはいえ、妻の負担が相当であったことは想像に難くない。

「あ…ありがとうございます、クレアさん…」

そう声を振り絞るのが今は限界だろうと悟ったクレア・フォートランはしばらく静かに寄り添ってからその場を後にした。幸いにも赤ん坊も非常に手の掛かる時期は脱していて、ニューヨークの自宅に帰ってきた今はスヤスヤと眠っていることもあり、母である風見あすかの悲しみを邪魔するものはなかった。それが幸か不幸かは本人以外の誰にも分からないことではあるが…

「あすかの様子がどうだったのか教えてくれ…」

マンハッタンの滞在先でクレアの帰りを待っていた兄の言葉である。

「今は…そつとしておくしかないんじゃないかしら」

「俺はあいつに合わせる顔がない… 自らが監督するチームのドライバーを死なせてしまったばかりか、そのドライバーが妹の夫だなんて悪夢以外の何物でもないじゃないか！」

「修さん落ち着いて。夫を失ったあすかさんはきつと貴方以上に悲し

んでいるのよ… 事故の原因だって何も分かかっていないのだし、貴方が今心を乱したところで何も状況は変わらないのではなくて？」

「それは分かっているが、だがな…」

なおも言い続ける菅生修を半ば無視してクレアは自分の部屋へと戻っていった。

「あすか…ハヤト… すまない…」

一人取り残されたりリビングで呪詛のように呟き続ける修であった。

「ハヤトせんぱい、ハヤトせんぱい…」

「アンリ、いつまで泣いてんだよ…」

「レオン、仕方ないさ。アンリはそれだけハヤトへの思い入れが強かったんだよ。俺だってまだ信じられないし、信じたくないんだ」

「その気持ち、分からなくはないです、新条センパイ」

そんな会話を交わしながらJFK空港で互いの目的地へと次第に分かれていくドライバーたち。

「グレイスン、2001年産のモンテフィアスコーネを持ってきてくれ」

「お坊つちやま、もつと高級な品をご用意することも可能ですが…」

「くどいぞ、私はそれを持ってこいと言っているのだ」

「畏まりました、お坊つちやま」

執事のグレイスンはフィラデルフィアにある別宅の地下のワインセラーへと向かう。オーストリアの本邸には及ばないものの、職業柄世界中に邸宅を構えている。グレイスンが見えなくなる頃になってランドルは独り言ちる。

「お前が生まれた年の、お前との別れに相応しいワインでなくては意味がない。感傷に浸るのも今日までだ、そうでなくては私らしくもない」

そう口にするランドルの眼から落ちた一粒の雫が、凜々しさを体現する頬の傷を掠めて流れていったのを見た者は誰もいなかった。

「まさかおめーの方が先に逝っちゃうとはなあ。風牙に乗ってる時はぜってー俺の方が先だと確信してたつてのによお… 俺はおめーとのこと、忘れねえからな」

誰とつるむでもなく式から足早にバイクで立ち去っていた加賀城太郎もまた、並々ならぬ思い出をハヤトと共有した人物の一人であり、周りあまり見たことのない表情をボストンから見える夜の海へと向けていた。レースが自分の大切な人をまた一人奪った重さは、やはり慣れることのない感情を伴うのだなと身を以て理解した加賀だった。

夜は誰にも等しく訪れる。皆それぞれ異なる感受性で思い思いの感情を抱きながら、一つの時代の終わりを受け入れようとしていた。そして、風見ハヤトを失ってしまってもレースは続いていくのだという現実によくやく目を向け始めていた。

2話 穴埋め

2025年8月末日

「オーナーとして非常に心苦しいのは確かだが、スゴウGIOグランプリチームが欠場するわけにもいくまい。マシンはガーランドSF G-03を使用するとして、問題はドライバーの方だ。それについて皆の意見をヒアリングするのが本日の主題である」

SUGOチームの総帥菅生幸二郎がそう述べて会議が始まった。

2025年シーズンまでに複数の運営母体が2つのチームを持つようになったサイバーフォーミュラ世界選手権。SUGOがスゴウGIOグランプリとスゴウGIOウイナーズ、AOIがアオイZIPフォーミュラとアオイZIPレーシング、ユニオンがユニオンセイバーとユニオンシールド、といった具合でこれら6チームが選手権上位を争う姿が常態化していた。1チーム2人体制を外すことで統合しようという話も持ち上がったが、一定数以上の賛成を必要とするFICCYの議上で否認された経緯がある。

選手権開始当時はそれまでのレーシングカテゴリの統合を目指していたサイバーフォーミュラ世界選手権。未来的な非内燃機関のスーパーマシンによつて、取って代わろうという動きが見られていた。ただ、2016年の第11回選手権でオフロードの開催が無くなったあたりから、その方向性は変わっていく。フォーミュラカーorツーリングカー、内燃機関or非内燃機関、ヨーロッパianorアメリカンなどといった従来の枠組みは残したまま、いずれのレーシングカテゴリとも仲を違えることなく多くの開催地を共有することとなったのである。

2024年の第19回では、常設サーキットとして富士岡はもちろんサルトサーキットにインディアナポリスマータースピードウェイに旧モンツァサーキット、他にも特設サーキットが作られたり市街地サーキットなどで開催された。いずれかのレースカテゴリでは使われているコースをサイバーフォーミュラでも利用する、という流れが加速していた。ちなみにモンテカルロ市街地での開催はサイバー

フォーミュラでの走行・競走は難しいと判断され、未だに実現していない。

このクロスオーバー化が興行的な成功にも繋がったと言えた。参加チームも増え、世界各国のスポンサーや視聴者を得ることもなったが故である。もちろん、F1にFe、WECやWTC、INDYにNASCARなども伝統を守りながら人気を博しつつ継続しているものの、CFGPXの独自性が揺らぐことはない。

閑話休題、静かな会議ではスゴウGIOグランプリの欠けてしまったドライバー枠を誰が埋めるかについての議論が進んでいた。いかんせん前任者が長く在籍し、実績・名声共に偉大過ぎ、また今回のことが突然だったので一向に纏まる気配もないまま時間だけが流れた。

結局、監督である菅生修と役員の車田氏の意見が強く反映され、スゴウテストドライバーのアンジェロ・バレーのレギュラードライバー昇格が妥当と結論付けられた。ただし第18回の2023年からスゴウGIOグランプリに在籍し、今年からスゴウGIOウイナーズでNo.1ドライバー待遇となったエデリー・ブーツホルツを昇格させてGIOグランプリに戻し、空いたGIOウイナーズのシートにバレーを新人として埋め込む案が採用された。

「……ということだ。現実的に採りうる最善策だと判断した。」

『私としても非常に心苦しいことだがな、菅生。私に風見の代わりが務まるとは到底思えんよ』

電話の先から聞こえるブーツホルツの声にも元気さは感じられなかった。

「余計なことは考えず、自分の走りをしてくれればいい。それがチーム監督として、また友人として私が言える唯一のことだ。また細かい打ち合わせはイギリスのファクトリーに戻ってから話そう、じゃあな」

『お前こそ私から察する限り心配な状態だがな。菅生、あまり思い詰めるなよ。それじゃまた』

電話を切ってからブーツホルツは俯いて考え込む仕草を見せた。

「風見…」

3話 現況

GPが開催されない夏休みだったにもかかわらず慌ただしい8月が終わり、第20回の選手権も佳境を迎える。第7戦のフランスGPでポイントリーダーの風見ハヤトが事故死したこともあって、チャンピオン争いは混沌としていた。

シーズン開始時の主要チームの布陣は以下の通りだった。

スゴウGIOグランプリ 「GIO」

風見ハヤト

レオン・アンハート

スゴウGIOウイナーズ 「GIO」

エデリー・ブーツホルツ

日吉明

アオイZIPフォーミュラ 「AOI」

新条直輝

ジエフリー・ジョンソン *

アオイZIPレーシング 「AOI」

司馬誠一郎

ヤン・ウー・チェン *

ユニオンセイバー 「ユニオン」

カール・リヒター・フォン・ランドル

セラ・ギャラガー

ユニオンシールド 「ユニオン」

アンリ・クレイトー

ミケーレ・アスカーリ *

シュトルムツェンダー 「シユトロブラムス」

ジャツキー・グーデリアン

マリー・アルベルト・ルイザ

コイヌールレーシング 「ユニオン」

ビリー・ハインツ・ガーネット

セバスチャン・パジェノー *

A・G・S・ [G I O]

カルロス・フィッツティパルディ *

カルソン・ニナ

ミツシングリンク [G I O]

ヴォルフガング・フォン・シュナイダー *

マーカス・マキネン *

S・G・M・ [シュトロブラムス]

ジェイコブ・ミハエル・レンツ

ルードリツヒ・ベロフ *

(*がオリジナルキャラクター)

「」内が搭載エンジンとなっており、概ね主要4メーカーから供給を受けている。S U G Oとの提携を機にC Fに参入して早くからチャンピオンエンジンとしての地位を確立したG I Oは、カスタマーチームとしてA・G・S・とミツシングリンクにも供給している。これはピタリア・ロペの熱心な売り込み、及び現在S U G Oチーム内での地位を確立したブーツホルツによる影響が大きいとされた。

主要3チームとほぼ同等のプライベーター、シュトルムツエンダーは言わずと知れたフランツ・ハイネル率いるチームである。彼が立ち上げたシュトロゼック・プロジェクトには彼の実家である有名自動車メーカー、シュトロブラムスもエンジン部門で参加して協力体制にあり、早期の成熟や耐久性のテストを企図してハイネルの古巣S・G・M・にもカスタマー供給している。

一方で日本の自動車メーカーの雄A O Iは独自性を保ち、現在のところ他のチームへのエンジン供給は行っていない。ドライバー選択についてはオーナーサイドの意見が強く反映されると言われ、日本人を主としてアジア系のドライバーを多く起用する傾向がある。今期デビューのヤンも期待の中国人ドライバーだ。

ユニオンはランドル家によって完全に吸収合併されてから拡大傾向にある。他メーカーより安価にカスタマー契約できるためか、ヨーロッパ系のチームのみならず特に新規参入チームはほぼユニオン搭

載からの流れが加速している。また、エンジンのみならずギアボックスやパワートレインなどの部分についてもカスタマー供給に積極的である。ただし、ユニオンセイバー・ユニオンシールドのワークスチームとは仕様がやや異なるとの噂が根強い。

次に2025年の開催予定を記す、開催地がより増して全15戦となっている。

アメリカ (4 / 13)	インディアナポリスMSW
ブラジル (4 / 27)	リオデジャネイロ特設コース
メキシコ (5 / 4)	ロドリゲスサーキット
オーストリア (5 / 25)	ユニオンリンク
イタリヤ (6 / 1)	旧モンツァサーキット
イギリス (6 / 15)	ヒースロー空港特設サーキット
フランス (6 / 29)	サルトサーキット
ドイツ (7 / 13)	ヴォルフスブルク市街地コース
スペイン (7 / 27)	カタルーニャサーキット
エジプト (9 / 7)	スフィンクスサーキット
アブダビ (9 / 14)	海浜砂中特設コース
シンガポール (9 / 28)	シンガポール市街地コース
オーストラリア (10 / 5)	アデレード郊外特設サーキット
中国 (10 / 26)	上海特設サーキット
日本 (11 / 2)	富士岡サーキット

(ポイントは上位6位までに10・6・4・3・2・1の配分)

近年の超ハイテク&高速化を憂っていたFICCY側は今期から車両開発に制限を掛け始めていた。具体的には開催地によるリストリクター設置の義務付け、サイバーシステムの介入度の縮小、タイヤのナロー化、車輪数によって決まる最低重量の引き上げなどである。概してドライバーにとって運転しづらくなったことは言うまでもなく、それが興行的な成功に繋がることをFICCYは期待していたと言える。

しかし結果としてそれが不世出の天才を失う遠因となってしまう。た今となつては、何とも言えない気まずさを皆が共有することに繋が
るだけだった。

そんな空気が醸成され、消し去ることが出来ないまま第10戦エジ
プトGPを迎えようとしていた。

4話 新条の葛藤

2025年9月4日

「もう少し下がってください！もう少し下がってください！」

エジプトでのGPウィークが始まる頃、記者たちの関心はCFDAの会長へ就任したエデリー・ブーツホルツに集まっていた。サイバーフォーミュラ世界選手権に参戦するドライバーが有志で集まって発したCFDAはピタリア・ロペから風見ハヤトへと会長職が渡っていたが、当面は止むを得ずブーツホルツが務めることとなった。そしてそのブーツホルツから、FICCYやマシンコンストラクターの団体であるCYCAへの何らかの声明が発信されるとのプレスリリースが事前に行き渡っていたのである。

「CFDAとしては、風見ハヤト選手の事故死に関する精緻な原因究明、及び同様の悲劇が繰り返されないための改善策の提示を強く要求する次第であります」

「車両に対するいくつかの制約事項が今期から追加されました。ただしそれらはドライバーの意見が十分に反映されたものとは言えず、ドライバーの立ち位置を蔑ろにしているという意見もあります。それについては？」

「確かにそれについては一定以上認めざるを得ない部分もあると明言させていただきます。ですがそのことと今回の事故との因果関係が分からない以上、今ここで仔細を議論する必要はないと考えます」

「風見ハヤト選手が使用していたサイバーシステムの特異性が今回の制限で特に大きな影響を及ぼしたという一部報道もありましたが？」

「それについても、我々としては調査を要請し、その結果をあまねく開示していただきたいと言うほかありません」

…

「いつになってもこの手のプレス対応は慣れないものだな」

それなりに長時間の記者会見を終え、ブーツホルツはため息交じりの安堵の声を上げる。

「他に適任者が居ませんから… ご苦労をおかけしました、ありが

「とうございます」

副会長となった新条直輝がブーツホルツを労う姿がそこにはあった。

「例には及ばんよ新条君。キャリアを重ねてきた者の責務のようなものだ」

「それにしても… やはりサイバーステムについて突っ込んでくる記者が現れましたね」

「アスラーダを昔から知っている人間としては複雑な気分には違いないな」

「そうですね…」

特にアスラーダのこと、風見ハヤトのことについて知り過ぎているとも言える2人の会話の歯切れは、お世辞にも良いものとは言えなかった。

「なんにせよ、これでこの週末が終わるまでは走ることに集中できる。それだけでもドライバーとしてはありがたいことだ」

そう言い残しつつブーツホルツは自チームのモーターホームへと帰っていった。

「アスラーダ、そして風呀…」

一人になってから考え込む仕草を見せる新条だった。

2022年の第17回大会のチャンピオンマシンとなった風呀AN-21Bだったが、翌年には加賀城太郎の引退と共に姿を消した。アオイZIPは2023年シーズンをアルザードNP-2、途中からはイグザードZ/A-11に変えて戦うこととなったが、それでも昨年ほどの結果を残すことは出来なかった。アオイ開発陣はそれを憂いて風呀から何か現行のマシンへ落とし込めるものがないかを探り、そのサイバーステムのダウングレード化したものとブースト機構を開発に反映させて2025年からイグザードZN/A-01を投入した。

奇しくもこの年からのサイバーステム制限枠ギリギリに収まったこのマシンは開幕から堅調な成績を残し、速さと脆さが顕著になっていた風見ハヤト駆るレーアスラーダAKF00/G+を脅かす存

在となっていたのである。一部ではアオイこそがCYCA内での立場を生かして今期からのレギュレーションに影響を及ぼしたとすら噂されるほど、見方によっては出来過ぎた話だった。もちろん、風見亡き今チャンピオンへの道が大きく近付いているのは事実なのだ。

新条もその内実を風聞だけでなくオーナーである葵今日子が時折漏らす言葉の端々から感じ取っていただけに、ブーツホルツとの会話に言わば動揺を隠せなかった。

5話 同志

2025年9月5日

エジプトGPが始まった。カイロ郊外、ギザの砂漠の大地に設置された特設サーキットが舞台だ。大スフィックスを始め、3人の王が祀られているとされるピラミッドたち、これら世界遺産を外周するように作られ、北・東の市街地部分と、スフィックスコーナーを抜けた後のバックストレート以降、南と西を走る砂漠部分でコースの特性が異なるのが特徴である。市街地部分は平坦だが路面はダスティーでも低く、直線と直角コーナーを繰り返すレイアウト、砂漠部分はサイバフオーミユラ特設サーキット用のハイグリップ路面が用いられ、高低差が大きくバンク角も大きいほぼ360度の高速旋回や逆バンクになっているヘアピン、3kmに及ぶ西側のホームストレートを備えている。

余談になるが、サイバフオーミユラで用いられるハイグリップ路面はアーティフィシャル&シンセティックサーフェイスの技術の賜物とされる。日本語に訳すと人工合成路面となるが、繊維や樹脂・オイルを砂と混合して作られ、従来のアスファルトとは大きく異なる特性を持つ。何よりもその場で塗り込んで固める必要がなく、1平方m単位からより大きいサイズまで予め持ち込んで組み立てるだけでコースを作ることができる点で選手権には不可欠なものとなっている。

さて、本題に戻ろう。2つのセクションからなるスフィックスサーキットは1周13.3km、決勝はこれを35周して争われる。(数年前より一部の特例を除いて周回数走破距離が455kmを超える最小の数となるルールが定められた) 今、まさに初日のプラクティスが始まろうとしていた。

「ふう、これはなかなかどうしてセッティングが決まらないものですね。他の方はどうなんでしょうか？」

アオイZIPレーシングのルーキー、ヤンが最初のプラクティスを

終えて思わず溢す。

「砂漠地帯のせいだろうけど、全体のμの低さと不安定さが今年のタイヤには厳しいのかな」

司馬が自らの見解を述べて返答する。

「私は今年からなものでそのあたりが何とも。司馬さんは去年までと今年で大きな違いがあるとお考えですか？」

「マシンアジャストが難しくなったのは間違いないね。セッティングにおけるサゼッションや走行中の微調整・アシストでサイバーシステムの助けを得られにくくなってるし。特に路面状況が変化しやすい時にそれがホントに効くんだよ」

「なるほど… これはJJのやつも苦戦してるかな…」

「誰かに噂されている気がする」

「ん、ジェフどうした？」

「いや、なんでもないよ、ナオキ」

「そうか、それならいい。マシンの調整について困ってたりはしないか？」

「路面が滑りやすくてあまり経験のないトラックコンディションなんだけど、メカニックとも少しづつ詰められているから今のところは大丈夫。いつもありがとう」

「気にすることはないよ。ジェフをこちらに引き込んだ俺の責務でもあるからね」

アオイZIPフォーミュラでもドライバー同士の会話が弾んでいた。尤も、新条とジョンソンの両名は以前からの仲であるため、さして特別なことでもなかった。

話は2020年に遡る。パフォーマンス不足を理由に名雲京志郎率いるAOIから追い落とされて一時的にCFの世界を離れた新条直輝は、新天地に北アメリカ大陸を選びNASCARに参戦した。ここで活躍してドライバーとしても一皮剥け、最終戦でユニオンセイバーへ電撃的に復帰した、というのが衆目の知るところである。この新条と同じ時期にNASCARの最上級クラスにデビューし、新条と

交友を深めたのがジェフリー・ジョンソンその人である。そして新条がCFに戻った翌年から頭角を現したジョンソンは、2022・2023年とシリーズチャンピオンに輝く。その才能が買われ、また新条からオーナーサイドへの口添えもあつて2024年からアオイZIPレーシングに加入し、初年度にルーキーオブザイヤーを獲得。今年アオイZIPフォーミュラに異動して晴れて新条のチームメイトとなった。今年もここまで新条にこそやや遅れを取っているが、コンストラクターズタイトルを狙うAOIの大きな戦力になっていることは火を見るより明らかに結果として現れている。NASCAR時代からJJの愛称で呼ばれる朗らかなアメリカ人である。

ちなみにヤンとジョンソンは同じ年で同じAOI所属、そして開幕前のドライバーブリーフィングで隣同士に座ったこともあつて互いに打ち解けていた。デビューしてすぐのヤンと同じ目線に立てる良い相談役でもある。ドライバーにあまり見えなと言われる学者風で華奢な風体、穏やかな性格はジョンソンと対を成すようではあつたが、お互いの関係性にさほど影響を与えることはなかつたようだ。

6話 一強

2025年9月7日

第10戦エジプトGPは決勝の日を迎える。前日の予選では新条がPPを獲得。トラクションで苦しむマシンが散見される中、コーナー立ち上がりでの加速で光るものがあつた。フロントローにはパワーで勝るGIOエンジンを生かした最高速でタイムを稼いだブーツホルツ、以下は日吉、ジョンソン、ランドル、司馬、アンハート、ヤン、グーデリアン、クレイトーとトップテンまでが揃う。30台のマシンと30人のドライバーが今か今かとスタート時刻をグリッド上で待っていた。

「新条くん、いい？後ろのスゴウの2台は直線は速いけどタイヤへの負荷はきつとうちより大きいはずよ。前にさえ出られなければ確実にあなたのレースになるわ」

「わかっています、今日子さん。スタートから数Lapが山場ということですね」

「まあ今更あなたに伝えるほどのことでもないわね、頑張つて」

「いえ、感謝してますよ。行つてきます」

「菅生、戦略的にはどうだ？」

「タイヤへの入力が向こうの方が小さいらしい。ブーストの使いどころを選ぶべきだろうな」

「やはりそうか。序盤に押すことも考えたが、隊列が固まるまでは労って大人しくしておくか」

「私もそれがいいと考える」

「了解、日吉もそれは理解しているか？」

「伝える前に既に意図を汲んでいたよ」

「さすがだな、じゃあ行つてくる」

「行つてらっしゃいませ、お坊っちゃん」

「行ってくるぞ、グレイスン」

「ハイネル！今回は特に遅えなこのマシンは！開発者の顔が見てみてえよ」

「なんだと：☒ シュピーゲルがこのコースと相性が良くないとは始まる前から言っていただろう」

「それをなんとかするのがユーの仕事だろうが！」

「もう切るぞ！つべこべ言わずに走ってこい！」

各チームのレース前の会話であった。（一部抜粋）

マシンはフォーメーションラップを終え、グリッドに並んで行く。全ての車両が整然と並んでから、レッドシグナルが一つまた一つと灯り：ブラックアウトした！

全ての車が猛然と加速し始める。やはり新条のイグザードは蹴り出し良く、1コーナを先頭で抜けるのは確実に見えた。そして同様にジョンソンもセカンドローインサイド側からスタートを決め、日吉に並んでいく。

「くっ… ブロックしても間に合わないか」

「よし、これは抜ける…！」

少し長めのホームストレートエンドでジョンソンは日吉をパスし、1コーナを抜けた。

「良くない隊列になってしまったものだな… 前を捉えるどころか後ろを気にせねばならなくなる」

ブーツホルツはフロントスクリーンの端で後方を確認して呟く。

数周を消化する間に大きな順位変動はなく、新条が3秒ほどのリードを形成した。2番手のブーツホルツの後ろにはマークするようにジョンソン、少し離れて日吉、差がなく司馬、そこから若干開いてヤン・ランドル・アンハート・クレイトーの隊列、グーデリアン以下は離されつつあった。ランドルのペースがやや落ち始めていた。

「マシンの調子がおかしい。どこか壊れているかもしれない」

「テレメトリを確認します」

「サイバーシステムの方では感知していないようだ。あるいは見落としやすい箇所かもしれない」

ランドルのレースは厳しいものになりそうだった。

「新条くん、良い感じよ。後ろはタイヤを気にしてかブーストを使えないみたいね。もし使ってきたらその時だけカウンターでこちらもブーストを使いなさい」

「わかりました、今日子さん」

そう、昨今のサイバーフォーミュラにおいてはブーストがさほどオーバートイクに役立つことは少なくなってきた。各チーム間のブースト性能の差異が小さくなったことに加え、少なからずマシンに負担をかけることを避けたいという心理、そして相手が使えば自分も使つてイーブンにするカウンター戦術が確立されてしまったためである。特にこのエジプトは気温も高く、エンジン負荷・タイヤ負荷の共に大きいことが各ドライバーにブーストオンを躊躇わせることに繋がっていた。

ほぼ全ての車が1回ストップでピットインを済ませる戦略を取る形になっていた。そしてその最初で最後のピットインが近付いてきた頃、ジョンソンが遂にブーツホルツに仕掛ける。

「後ろから見ていても分かるほどタイヤが苦しいみたいだ。コーナー出口の加速が鈍い分、取り柄の最高速も殺されてしまっていると見える」

ジョンソンは的確に状況を見抜いていた。更に言えば高速コーナーの旋回速度も差が付き始めていて、いよいよガーランドには苦しい展開である。

市街地セクションで一気に後ろに張り付いたジョンソンはスフィークスコーナーでブーツホルツのラインを潰しながらインサイドへ侵入、立ち上がりで僅かに前に出るとバックストレートで並びかけられはしたが、そのまま次の高速コーナーで振り切つて前に出た。

「菅生、力及ばずだ。以降ポジションキープを優先するぞ」

「やむを得ん、認めよう」

これで勝負ありだった。アオイチームのピットワークもミスなく、新条・ジョンソンの1―2体制はゴールまで揺るぐことがなかった。

優勝は終始安定した走りで新条、少し差は開いたが2位にジョンソン、3位は守りきったブーツホルツ、レース終盤にペースが落ちた日吉を交わした司馬とヤンが4位・5位でその日吉は6位、ここまですポイント獲得となった。ランドルはトラブルが複数箇所へ波及してしまいリタイヤ、グーデリアンはタイヤへの負荷が大きすぎて予定外の2回目のピットを余儀なくされポジションを大きく下げた。

表彰台で喜ぶ新条やジョンソン、それを見守るアオイチームの面々とは裏腹に、スゴウ陣営は皆一様に口を真一文字に結んだままだった。

「今のガーランドでは厳しいわね」

「仕方あるまい、アスラーダに頼りすぎたツケのようなものだ」

「ハヤト君の腕にもね」

「無論だ。こうなると来年のことを考えた方がいいのかもしれない」

「それは気が早いんではなくて？」

「監督としての現実的な判断だ、不本意ではあるがな」

「貴方もすっかり大人になってしまったことね」

「そうならざるを得ないということさ」

「わかった、一つ私に考えがあるの」

「どんな考えだ？」

「今はまだナイショ。形になりそうなところまで来たら教えてあげるわ」

「クレア、あまり揶揄わないでくれよ」

「私は本気よ、修さん」

「争つても仕方がないな、君を信じることにしよう」

「期待して下さって結構よ」

そんな会話を監督とチーフデザイナーは交わしていた。

こうしてエジプトGPの幕は閉じた。風見ハヤトが居なくなつてからすつかり皆が見慣れてしまった、アオイの強さがただ際立った大

会
だ
っ
た
。

7話 展望

2025年9月30日

「~~~~~」

鼻唄を奏でながら端末に向かうクレア・フォートランの姿があった。ここはイギリス・ブラックリーにあるスゴウのファクトリー。

「これで…よし、と」

選手権は終盤のアジアラウンドに入って第12戦シンガポールGPまでが終了したものの、既に新条とアオイのチャンピオン獲得は決定的となっていて、クレアは帯同しなくともよくなっていた。そして、自らのプロジェクトを推し進めることに集中していた。

表向きには明らかにされていないが、監督である菅生修が具申した来期集中の方向性は既にオーナーサイド、ドライバーサイド共に了承するところとなっていた。特に、その核となるのがクレア・フォートランによる新しいマシンの開発であることを。

「ちようどGIOがより小型のエンジン開発を進めていてくれた助かったわ。今のレギュレーションだと、重量バランスとサイバーシテムの効率的利用が不可欠ですからね…」

独り言を呟きながら休憩するクレア。しかし、その声に応えるものがいた…!!?

「私に出来ることなら何でも協力しよう。それがハヤトの為に出来る私の全てだ。」

クレアが目をやる端末のトップにはこう記されていた…

” ALBION Project ”

2025年10月6日

「本当によくやったな、カルロス。次のGPまでは少し間も開く、故郷に帰るもよいし、アジアは過ごしやすく良い国も多い。好きに過ごしなさい」

「はいー！ロペさんありがとうございますー！」

この美しい師弟関係はロペとフィッティパルデイの間に結ばれた

ものである。姓を見てピンと来る人も多いだろう、カルロス・フィッツパルデイは曾祖父にエマーソン、親戚にもクリスチャンやエンツォ、ピエトロといった多くのレーサーを輩出している一族の間である。彼は早くからサイバーフォーミュラの世界に興味を示し、その志は同郷の英雄ピタリア・ロペとの出会いで決定的となった。下級カテゴリーであるJr.サイバーフォーミュラで瞬く間に頭角を現し、若干20歳にして今年デビューした期待の新人だ。

前日のオーストラリアGP、大雨に見舞われたアデレードは大荒れのサバイバルレースとなった。スピンアウトでのリタイヤやマシントラブルが続発、完走したのが12台だけという近年稀に見る展開を繰り広げた。

新条こそ安定した走りで優勝したもののジョンソン・司馬・ヤンと他のアオイ勢はリタイヤ、スゴウはブーツホルツ・日吉が2・3位に入ってアンハートとバレーガリタイヤ。ユニオンは軒並みドライブトレインに同系統のトラブルが発生してまさかの全滅と凄まじい結果である。

一方、そのおかげで利を得るものも居た。シュトルムツェンダーのルイザ、S・G・Mのレンツ、そしてA・G・S.のフィツティパルデイがそれぞれ4・5・6位に入り、今季初ポイントを獲得するに至った。

「たしかに運に恵まれたのは間違いない。でもそれをモノにしたのは僕だ。そして何よりロペさんに褒められたことが嬉しいんだ……」

空港へ向かう道すがら、カルロス・フィツティパルデイは感慨に耽っていた。少なからず親の威光について他者に僻まれたり妬まれたりすることもあったし、ロペとの関係についてもそれが影響したものと見られて実力を必ずしも正当に評価されていない風潮を感じていたし、本人もまた恵まれていることは自覚していた。それだけに、デビューした年のうちにポイントを取って一つ結果を残せたことが一層自分にとって意義があることだと理解していたのである。

「さてと、パパイ、ママイ…… ファアミーリアの皆に顔見せに行かなくちゃー！」

足取り軽く目的地へ向かうフイッテイパルデイの背中は将来への希望と夢に満ち満ちていた。

8話 終幕

2025年11月2日

「さあ今最終コーナーを回ってホームストレートへ！今シーズンラストの富士岡も勝ったのはこの男だ！新条直輝、今ゴールイン！」

実況の叫びと共に富士岡サーキットの盛り上がりは最高潮を迎えた。チャンピオン決定後の言わば消化試合とはいえ、日本人ドライバーが日本GPを勝つことはやはり格別のものであることを示すようだった。

「新条くん、やったわね！おめでとう！」

「アオイのマシンのおかげですよ、本当に感謝してます、今日子さん」
「観客もあなたを待っているわ！パルクフェルメに戻ってきたら存分に喜びを表しなさい！」

「はい、もちろんです」

各車がパルクフェルメへと戻ってくる。ウイニングランを終え、ホームストレートでドーナツターンを決めた新条が最後の最後にゆっくりと戻ってきて、ウインドスクリーンに覆われたコックピットから飛び出してきた。その瞬間を待ち侘びた観客たちが惜しみない歓声を送る。そして満面の笑みでそれに手を振り応える新条の姿があった。

表彰台は新条・司馬・ヤンとアオイ勢が独占、マシントラブルに見舞われ不慮のピットストップが発生したジョンソンですら4位に入った日吉のすぐ後ろまで追い上げて5位、6位には予選のスーパーラップで3位につけながらも決勝伸び悩んだランドルが入った。

一方でブーツホルツは司馬・ヤンと表彰台争いを繰り広げる最中にエンジンブローでリタイヤ、アンハートも予選の低調さが響いて中位集団から抜け出せずに終わった。バレーは終盤戦に複数回ポイントを取るルーキイヤーを送っていたものの、富士岡ではピットミスが災いして周回遅れという結果だった。

「今年もご苦勞様だった、監督」

「結果に関しては全て私の責任です。先日の合議通り、来期に懸ける

所存です、オーナー」

「スゴウにとつて悪夢の年だったことは疑いがない。監督だけの責任ではなく、チーム全体として改善に取り組むことにしよう」
「力を尽くします」

父と子の会話というのにはあまりにも愛に乏しい業務的な会話に終始していた。新マシン導入とドライバーを含めた体制維持は既に来期方針として決まっていたため、不協和音がチーム内部に響いていなかったことだけが救いと言えたのかもしれない。

表彰台ではシャンパンファイトが繰り広げられていた。どちらかといえば控えめな新条と司馬とヤンにしては珍しいほどに喜びを爆発させている姿が印象的であった。余談になるが実はこの3人でのトップスリーフィニッシュは今期初めてで、いつもならジョンソンがどこかに位置していて新条にシャンパンを盛大に浴びせかけたり、キャップに入れて呑んだり、ボトルを下で見ているチームクルーに渡そうとして割ったりなど盛り上げ役になっていた。今回は下から眺める役回りとなつたが、それでも笑顔に溢れるいつものJには変わりなかった。

「お疲れ様でございました、お坊っちゃん」

「ふん、面白くもない。技量ではなく性能差だけで結果が決まってしまっているようではないか」

「それは幾らかお口が悪うございます」

「すまない、つい不満を口にしたがそれではよくないな、来年のことを考えよう。スゴウはニューマシンを開発しているようだ、ユニオンも何か打てる手を探るとしようか」

「それが宜しゅうございますよう、お坊っちゃん」

「まずはグレイスン、レース後のティータイムだ！」

「はい！お坊っちゃん」

「来年こそは頼むぜハイネルう！ミーはレース中に寝てしまいそうだぜ」

「馬鹿野郎！お前のミスで失ったポイントがどれだけあると思ってるんだ！少しはそれを治す努力もしろ！」

「そーは言ってもなあ、マシンが牛みたいに遅えんだもんなあ」

「ぐぬぬぬぬぬ…」

「本当にいつまでも懲りないわね、このお二人も」

「ともかく、ルイザはよく頑張ってくれた。来年もよろしく頼むぞ」

「感謝します、出来る限りの努力は尽くしますわ」

「ルイザには甘えんだよなあ。ハイネル、女に弱いんだな」

「なんだと…」

各チームで様々な会話が交わされつつ、2025年のシーズンも終わりを告げた。誰しもがアオイ一強時代の到来をその身に感じつつ、それぞれの立場でシーズンオフを迎えることになる。

「私の出番は、まだか？」

「んー、どうかしらねえ。今はあなた、たとえそのまま載せたとしてもレース中に話せないのよ？」

「寝耳に、水だ。ジンケンシンガイ、である」

「あなた、”人”ではないでしょうに。でも分かったわ、意志だけでも反映されるようにプログラムする努力はしてみましよう」

「恩に、切る」

9話 密会

2025年11月20日

…キーン…

「3週間も経たずにまた日本に来ることになるとはな。要件を済ましたら久し振りに滞在を楽しむことにしようか」

ランドルが成田空港に自家用ジェット機で降り立っていた。彼言うところの要件とは、極秘に人に会うためである。その人とは…

「そうか、今ランディングしたんだね。まずは遠路お疲れ様、ここに着くまでの間もお気を付けて、Mr. ランドル」

『労いのお言葉ありがとうございます。へりでそちらへ向かいますので、あと数時間ほどを要するかと』

「分かった、招き入れる準備をしておくことにしよう」

『感謝致します。ではのちほど、Mr. 名雲』

電話を切ってから、名雲京志郎は独り言ちる。

「あの”ランドルくんが突然私に話を聞きたいとはね… おおよそ内容に察しはついているが、さてどうしたものか」

2時間余りが経った頃、ドアベルが鳴った。名雲が自ら玄関に向かい扉を開ける。

「やあ、よく来たね。あまり広くはなくて恐縮だが、寛いでいってけると嬉しいよ」

「いえ、突然の訪問をお許し下さって感謝しています」

「さ、冷える前に中へ入ることにしようか」

軽井沢にある名雲の別荘にて、今密談が始まろうとしていた。

「この時期に君が私の元へやってきたということが何を意味するのか、あらかた見当はついているよ」

「おそらくご推察の通りでしょう。」あの”サイバーシステムについて私は知りたいのです。ハヤトは僕に多くを語ってはくれなかった。今だからこそ、僕は知らなければならぬと考えているのです」

「ふむ…やはりか。いいだろう、少し長くなるだろうが構わないかね

？」

「構いません」

「では何か飲み物を用意した方がいいな。君の口に合うかは保証しかねるが、珈琲を入れた後にも話を続けることにしよう」

名雲はリビングを一旦離れていく。ランドルは幾許かの逸る気持ちを抑えながら、表面では平静を保って時間が流れるのを待った。

「どこから話せばいいのだろうかね。君は風見ハヤトくんの父親について知っているかね？」

「調べた情報だけでなく、ハヤトからも幾度か話を聞いたことはあります。アスラーダのマシン、そしてそのサイバーシステムを開発した当人である」と

「そう、風見広之氏の主たる功績としてそれが挙げられるだろう。そして、その開発の初期から私の兄が関わっていたところから話は始まるんだ」

∴

∴

話は風見氏と名雲氏の対立、そしてそれがアスラーダと凰呀という別々の完成形へと結実したこと、またそれらが従来のサイバーシステムとも大きく一線を画すものであったこと、過程で名雲京志郎本人がアルザードという非常の手段を用いてしまったこと、それ故に自らが直接CFの世界に関われなくなってしまったこと、加賀城太郎が全てを理解してあのマシンに乗っていたこと、実に多岐に渡って展開された。ランドルは自分が周りから何も知らされていなかったという衝撃を次々に受けていた。単に風見ハヤトを拉致した卑怯な男という一面で名雲のことを看做してしまっていたことを恥じる気持ちも生まれていた。

「ほう、そんなストーリーが秘められていたとは知りませんでした。ドライバーと共に成長するアスラーダ、ドライバーを理想へと引き上げる凰呀、確かにどちらも未来形ではある」

「そういうことになるね。皮肉なことにレギュレーションが凰呀に味方したとも言えるだろう。枠の中で最大限可能なことを先にサイ

パーシステムに詰め込み、それをドライバーに無理ないように押し付ける、それがどんな結果を齎したかは君が一番よく知っているはずだ」

「理解しているつもりです」

「そこで今度は私から訊きたいのだが： 君はこの情報をどう生かすのかね？」

「…」

ランドルは即答することが出来なかった。しばしの逡巡の後、言葉を紡ぐ。

「私は勝ちたいのです。そしてそのためには敵を知る必要があると考えたのです。今のあなたはアオイを離れ自由に話せる身、何かを得られないかと思つて頼つてみました。ただし、思いのほか濃厚な情報すぎたこともあり今の私にはすぐに処理できません」

「それもそうだろう。さて、私は君に与えうるすべてのことを伝えたつもりだ。それをどう使うのか、楽しみにしているよ、Mr. ランドル」

「感謝しています、Mr. 名雲。ではそろそろ」

「おっと、少し時間を掛け過ぎたな。すまないね、思い出話のようになつてしまった。この後はどうするのかね？」

「六本木にランドル家の持ちビルがありますので、そちらの別邸に泊まるつもりです。明日までは日本に滞在しようか、と」

「なるほど。玄関まで送つていこう」

玄関ドアを開けると既に黒塗りのユニオン製高級車が停まつており、軽く挨拶を交わしたのちランドルはそれに乗り込んで帰つていった。

「一つ彼に言い忘れていたかもしれないな。でもそれはあまり重要なことでもないからよからう」

最後まで名雲が葵今日子への複雑な感情を口にすることはなかった。

10話 旧友

2025年11月21日

「会う時間を作ってくれてありがとう。久しぶりだね、M s. 風見」
「本当に久しぶりね、ランドル。前みたいにあすかつて呼んでくれていいのよ、変に律儀なんだから」

「私としたことが、妙に畏まってしまったようだ。そう呼ばせていた
だこう、あすかさん」

「相変わらずね、でも会えて嬉しいわ」

「私こそですよ。日本に来る用事があって、あすかさんも今は日本に
いると聞いたものですから、無理を承知で連絡してみたんです」

「そうね… これからはもう海外を飛び回ることもないかもしれない
わね」

「それは…非礼なことを言ってしまったかもしれない、謝ります」

「ううん、そんなことはないのよ。仕方ないことだし、誰の責任でもな
いんだから。でも皆に会えなくなったのは寂しいかもしれないわね。
でも貴方みたいに機会があれば会いに来てくれる、私にはそれで充分
よ」

「お子さんも随分大きくなったようで」

「そうね。あの人との一番の繋がりがこの子に詰まっているのかもし
れないわ。せっかくだから相手してやって」

「ええ、喜んで」

名雲京志郎と密会した翌日、ランドルは風見あすかの元を訪れてい
た。二人が顔を合わせるのは、風見ハヤトの告別式以来、数ヶ月ぶり
のことだった。

「ランドル、私考えていたの。レースって何なんだろうって。沢山の
人が命を賭してまでスピードの限界を追い求めること、その先になに
があるのかということ… あの人も、一度大きな怪我をして、辛い
思いをして、でもまた戻っていった。そして… ごめんなさい、どう
しても気持ち、ね…」

「大丈夫ですか？無理はなさらないでください。ただ…実のところ、

私にも分からないんです。小さい頃から数多くのスポーツをやつてきて、結果も出して… もちろんレースの世界を極めていないという思いがあるのは確かですが、それだけではない思いもあつて… 言葉にするのが難しいですね」

「あの人も結局言葉で伝えてはくれなかった。義務感で乗り始めたサイバーの世界がいつしか自分にとって無くてはならないものに変わっていった過程、そして心境の変化… ずっと見ていた私ですら答えが出ないんですものね、難しすぎる問いなのかもしれないわ」

「同感です。それでも僕はまだ走っていたいんです。誰かのためじゃなく、自分のために」

「改めて言っても仕方がないことだけど、身体には気をつけてね、ランドル。やっと中継を観ていられるようにもなってきたの、応援しているわ」

「ありがとうございます」

そんな会話を一頻り交わしたのち、時より赤ん坊の泣き声が響く以外は沈黙が場を支配した。ランドルとあすかもまた古くからの友人といった感じで、多くの言葉が必要としないようだった。

「おっと、もうこんな時間か。あすかさん、僕はそろそろお暇致します」

「そうね、忙しいあなたをこの子が随分引き止めてしまったわね」

「いいえ、とんでもない。また伺わせてください」

ランドルは足早に邸宅を立ち去っていった。あすかには遂に伝えなかつたが、以降のスケジュールは相当に押していたのである。

「あなたはどんな子に成長するのかしらね。私に似るのか、あの人に似るのか。何よりも心の優しい子になってね」

あすかは改めて二人きりになった部屋の中で赤ん坊に語りかけていた。この子がこれからどんな人生を歩むのか、それを知る人はいない。親の願いという思念がただ注がれるのみであった。

「エピメテウスの進捗状況についてはどうなっている？」

「シーズン途中から開発を始められたこともありプロトタイプは既に

走らせられる段階に来ています。ただユニオンのエンジン開発が完遂しておらず、その完成形によっては微調整が必要になるかと」

「エンジンの完成を急がせてくれ。年内のうちに風洞および実走でのテストを行いたい。シーズンオフのテスト日数に制限が加わったとはいえ、早くに動かせるのに越したことはないからな」

「承知しました、Herランドル。年内には必ず。」

「よろしく頼む。直に私も日本を発つ。北米でのプロモーションを終えてからになるが、オーストリアに帰り次第ファクトリーにも顔を出す」

「道中お気をつけて。お待ちしております」

成田空港で慌ただしく会話を交わすランドル。相手はチーフエンジニアのハインリヒ・リントである。スゴウと同じくユニオンもまた来季の新マシン投入を決めていた。オーナー兼監督兼ドライバーのランドルがイシュザークのマイナーチェンジを蹴って英断したことであった。ニューマシンの名前はエピメテウス、操作性の良さを売りにしてきた従来までのイシュザークとは毛色の異なるマシンとなる算段である。

「さて、心惜しいが日本に別れを告げねばな。次に来れるのはいつになるだろうか」

「そう言い残しながらプライベートジェットのタラップを登っていくランドルであった。」

11話 究明 — 前編 —

2025年12月6日

パシャ：パシャパシャ：

シャッター音が鳴り響くのはモナコ公国モンテカルロ市街地に佇む、高級ホテルのとある広間内である。翌日に控えたFIA表彰式に先立って行われる、FICCY及びCYCAによる記者会見のために多くのメディアが集まっていた。衆目が予想するところはやはり、故風見ハヤトの事故に関する何らかの報告があるのではないかということだった。

「ブーツホルツさん、どう思いますか？」

「少なくとも君と私が呼ばれたという点だけで自明だろうな。元はCFDAからの要請であるわけで、場合によっては終了後に我々が囲まれることもあるやもしれん。そのあたりの対策は万全かね？」

「二応チームとも話をして打てる手は尽くせたと思います。スゴウの方はどうでしょうか？」

「問題ない。最悪の場合、菅生が矢面に立つてくれると言ってくれたからな」

「修さんが…」

「あいつは俺たちより既に知っていることも幾分多い。上手く交わしてくれるだろう」

「わかりました」

「新条君はあれから何かしら自分で調べたりしたかね？」

「そのことについてなんです…」

2025年10月28日

話は2週連続開催だった中国GPと日本GPのインターバルにまで遡る。新条は束の間実家に帰る前にあるところへと足を運んでいた。

「おめーの方から会ってえなんてどうゆう風の吹きまわしだあ？まさ

かサイバーやめるから代わりに乗れとかじゃ…なさそうだな」

「まあね。加賀に話があつて来たんだ」

「そんなこつたらうと思つた。で、なんだ話つてのは？」

「君もエジプトの時の会見については聞いていると思う。風見と君とは他のドライバーのそれとは違う関係性だつたように僕は思つててね、だから事故のことに關しても何か別の見解や意見があるんじゃないかと考えたんだ」

「あんまり掘り返したくはねえ話だがなあ、まあ仕方ねえか。いいだろう、話してやるよ。にしてもおめー、どうして俺の居場所が分かつたんだ？」

「ははは、僕は”アオイ”のドライバーだよ。北斗くんとも知り合いだしね」

「そーいうことか、その線から攻めてくるあたり相変わらずいやらしいやつだな」

「それはまたひどい物言いだな」

…

2025年12月6日

…とまあ話を聞いてきたんですよ」

「なるほどな。それで、どうだつたんだ？」

「彼らはいわゆる”ゼロの領域”というシロモノでレースの最中ですら何かしら通じ合っていたようなんです。僕自身、実はそれに近い何かを感じ取つたこともあるのですが…」

「ほう、またオカルトめいた話だな… それはどんなものなのか知りたいものだ」

「感覚が研ぎ澄まされた状態に近いある種のゾーンみたいなものだと私は考えています。周囲への知覚、そして反応が相当に早くなり、まるで時間がコマ送りになっているように感じる能力…」

「化け物じみている…。そして加賀君が出した結論は？」

「ハヤトがゼロの領域を会得している以上、予期不可能なほどのイレギュラーを起こさない限り死に繋がるほどのクラッシュを喫するこ

「とはない、と」

「つまりはドライビングミスなどヒューマンエラーの線はほぼ完全に消せる、ということだな」

「そういうことになると思います」

「となると… やはりメカニカル面か」

「かもしれません。映像も幾度となく見ましたが、ドリフトアングルを普段より大きく取っている以外は何ら変わった点もありませんでしたから。」

「ふむ… 他に聞けた話などは？」

「あまり多くを語りたがりませんでしたので… 蒸し返すな、と言わんばかりでしたし…」

「やむを得んことだ。よかろう、あとは会見を見てから考えることにしよう。繰り返すが、特に会見終了後のプレス対応を慎重にな」

「わかりました。それではまた」

「うむ」

二人の会話は終わり、控室から順に出ていく。会見は30分もしないうちに始まる予定であった。

「そろそろ会見が始まるわ… リモートで電源を点けて… チャンネルはこれで合ってるわね、よし。あら？あなたも観たいの？」

「…」

「聞いているの？全く話さないというのも珍しいわね」

「…」

「(何か思うところがあるのかしら?)」

クレアとアスラーダが不思議な空間を形成する中、まさに会見は始まろうとしていた。

12話 究明 ―中編―

2025年12月6日

「えー、本日はお忙しい中お集まり下さりありがとうございます。C FDAからの要請がありました、今シーズン6月29日のフランスGP決勝において事故死された故風見ハヤト選手に関する調査結果を開示することを目的として、会見を開く運びとなりました。これよりのご報告につきましては、FIA会長である私シャルル・トッドに代わりまして、FICCY会長及びCYCA代表により進めさせていただきます、予めご了承ください」

喧騒を切り裂くように始まりの言葉が告げられ、多くの人が注目を寄せるなか会見が始まった。壇上には4名が登っており、左からスゴウ代表菅生幸二郎、FICCY会長サミュエル・シロン、FIA会長シャルル・トッド、CYCA代表葵優作と並ぶ。日本人2名とフランス人2名、いずれも姓を見ればわかる通り親や親戚の代からモータースポーツに関わってきた一族の人間だ。

「……という解析結果から、風見選手のドライビングミスは認められないと判断し、その上で前後状況や車体に残されたブラックボックスの調査を行いました。」

纏めますと、当該コーナーにおいて風見選手はイン側の周回遅れの車両をアウト側から交わしつつ進入、その際の速度はそれまでの進入に比べて20数km/hほど早く、ブレーキングに加えて大きめのドリフトアングルを取っていたと判明しています。その際に、周回遅れの車両から何らかのパーツが落ちそれがアスラーダの車体下部の後方ドライブレイン右部を損傷たらしめ、また同時にタイヤが巻き込んだ路面のデブリ、このデブリはそれまでに他車両から欠損したウィングの一部と考えております、それが前方ドライブレイン左部をも破壊しました。

これら2箇所のほぼ同時の損傷、また若干とはいえスピード過多の

ドリフト状態でコーナー外側のレコードラインを外して走行していた点、それらによりサイバーシステムの瞬発的走行保全能力を超過してコントロール不能に陥ったまま車両はスピン状態に突入、のち宙を舞ったマシンはマシン上部からタイヤウォールを超えてフェンスに激突し、直接的にはこの衝撃によるショックが死因となったと考えております。

∴

以上がご報告となります。これより質疑応答の時間を設けたいと思います」

「今季からのサイバーシステムへの制約強化が今回の死亡事故に対してどの程度影響を与えたと考えられるか、お答えください」

「それに関しては昨季までのものであっても防ぐことが困難だったであろうと結論付けています。特に緊急性を要するトラブル発生時の介入へは制限をかけていなかったためです。人命に直結することですので、言うまでもないことだと断言します」

「アスラーダが搭載していたサイバーシステムの特異性に関してはいかがでしょうか？」

「それに関しては私が。確かにアスラーダに搭載されていたサイバーシステムが他と一線を画するものであったことについてはスゴウ代表である私自身が認める次第であり、その仔細に関しては公表しうる範囲の全てをオープンソースとして各所に提供していく所存です。

ただし強調しておきたいのは、このサイバーシステムがレギュレーションを逸脱するほどドライバーに優位性を与えるものではなかった点、そして故風間ハヤト選手の技量に対する疑義をもたらす類のものではないという点です。」

∴

会見は予定よりも大幅に長引き、この後に予定されている各部門の表彰式にまで影響が出かねないほどになってしまっていた。それでも漸くと言っていいほどの時間が経過したところで終了し、プレスに興味は各チーム関係者へのインタビュに移っていった。

「CFDA代表として満足のいく回答は得られたと考えています。次

はこれを教訓としてどう活かすかの部分でしょう。

アスラーダに関しては菅生代表が述べたことが全てです。私個人の意見が挟まる余地は感じませんし、今でも風見君への尊敬の念は揺らいでいません。」

「私もブーツホルツさんと意見を同じくしています。」

幸いにもドライバー達への追及はそれほど強いものではなく、ブーツホルツと新条はさほど長時間拘束されることなくその場を後に出来たのだった。

13話 究明 — 後編 —

2025年12月6日

「なるほどねえ。まあ想像はしてたが、ハヤトが単なるヘマで死ぬことあそりやねえわな。にしてもイレギュラーに次ぐイレギュラーか、ツいてねえな」

「加賀はもう分かってたみたいなのぶりなんだね」

「あつたりめえだ。ファイルはそこまで詳しくは知らんと思うが俺とハヤトの関係はそうチャチなもんじゃねえんだよ」

「…」

グレイとファイルがメカニックをしているファクトリーに加賀はこの日訪れていた。加賀らしいというか、この記者会見のことを知ったのがファイルに会ってからだだったのはお約束である。

「そういや、なんでここに来たんだ？」

「盟友に会いに来ちやいけねえつてのかよ、グレイ」

「お前さんが絡むとなんだかキナ臭さを感じてな」

「そんなに危険な話じゃねーよ、安心しな。昔の俺とは違うんだぜ」

「どうだかねえ。で、用件は？」

「ちーつと真面目な話になるんだがよ、…」

加賀とグレイ達のレースでの付き合いは加賀のサイバー引退と共に一時途絶えていたが、ここからまた歯車は動き出すのだった。

「何か思うところでもあつて？アスラーダ」

「…」

「ずっと黙りこくっちゃって、変な子ね」

「どうしても、ハヤトを助けられなかった。使える全ての機能を同時に開放しても、間に合わなかった」

「…あなたには、分かっていたのね」

「私は、悲しい」

「みんな、気持ちは同じよ。だからこそ、これからできることを考えましょう」

「…」

「とりあえず、あなたにこれをインストールして適応してみるわね」

「…なんだか、霧がかかったようで居心地が悪い」

「やはりそう感じるのね。制限枠に対してそこを遮断するシステムを組んでみたのだけど」

「嬉しい気持ちにはならない」

「でしようねえ。困ったものだわ」

新マシン開発もなかなか一筋縄ではいかないことが窺い知れる一幕である。のち、試行錯誤の末にクレア・フォートランはアスラーダから一部抽出した機能を複製して新しいサイバーシステムへと埋め込むことで、新マシンの脳とも言えるサイバーシステムを完成させることとなる。それはオフシーズンテストが開始される僅か数日前、ギリギリでの出来事になるのだった。

「不運、だな… レースの世界だけに仕方がないのかもしれないが、ハヤトの身にそれが起きてほしくはなかった」

「左様でございませう、おぼっちゃま」

「それはそれとして受け入れざるを得ない、か。」

ああそうだ。リント、スゴウから発表されるアスラーダに関する情報は無論収集し、その上で得られたフィードバックからエピソードに載せられる部分は載せるようエンジニアのケツを叩いておいてくれ。あまりテストまでに時間も無い、頼むぞ」

「承知しました、オーナー」

「凡そどんなものかはあの男から聞かされていたが、その詳細を知れるのであれば打てる手として利用はしたいからな」

ランドルは一ドライバーとして悲しみを想起する間も与えられず、チームオーナーとして、またエースドライバーとして身を振ることを余儀なくされた。彼のプロ意識があつてこそそれは成立することが出来たと言つていい。ユニオンの新マシンも着々と完成への途上にあることが窺えた。

2025年12月7日

「あの会見の翌日に表彰式なんて組まれてもな…」

新条が複雑な笑みと共に表彰されるのもさもありなんといいたところだろう。今季はドライバーズ・コンストラクターズの両タイトルを圧倒的な差で獲得するには至ったが、今回もまた世間の一部ではライバルの離脱によって転がってきたという、初めてチャンピオンを獲得した時と同じ見方を向けられ、それが少なからず新条本人の耳にも入ってしまったということも影響していたかもしれない。

そして同時に風見ハヤトという不世出のドライバートもう永久に直接対決出来ないことが、彼の心に小さな影を落としていた。世間の意見を真っ向から覆す機会が、もう二度と訪れないが故である。

「それでも、走り続けるしかないんだよな、トップを。アイツがずっとそうしていたように」

来季に向け、アオイもマイナーアップデート主体ではあるが、ニューマシン攻勢を仕掛けてくる他チームに対して迎撃する準備を整えつつあった。専門家もしばらくはアオイ一強が続くと見ており、衆目から最も大きな期待が寄せられているのは確かである。

「菅生、この形の決着でよかったと思うか？」

「最善に近いとは言えるだろうな。アスラーダの情報が開示されたのも仕方がない、むしろ俺たちの肩の荷が降りたって印象すらあるな」
「まあそれはあるかもしれないな。それにしても、風見のことは改めて不幸としか言いようがないな。チーム側に責任が無かったことは幸いなかもしれないがね」

「もし仮に自分の身に降りかかっていたとして、違う結末を導くことは難しかったと素直に思う。複雑な気持ちはまだ残っているが、スゴウの来季のために力を注がんとな」

「ドライバートとして全力は尽くすぞ、菅生」

「ああ、期待している」

「ニューマシンは年明けになる形か？」

「クレアが頑張っているが、完成にはもう少し時間を要しそうだ。」

ブーツホルツたちには迷惑をかける」

「いや、戦闘力のために待つのは仕方なからうよ。私はもう慣れてい
るし、理解してもいるから問題ない。レオンを始め若いやつらには私
からフオローを入れといてやる」

「それは助かる」

「ではまたな」

随分長い付き合いになった監督と1stドライバー。やるべきこ
とは互いに見えていて、無駄な会話を必要としない空間を共有してい
たのだった。

こうして2025年シーズンが文字通り終了した。この年に起き
た最大にして最悪の悲劇に対する清算が済んだのだと、人々は判断し
たためである。人はいつまでも感傷に浸ってはいられない。特に現
場に近しいところから、意識は来るべき次のシーズンへ注力する方向
へ向き始めていた。